

農林水産大臣賞受賞

独自の活動で「ふるさと愛」をはぐくみ、誰もが自慢の大篠塚に

受賞者 **おおしの緑地会**
(千葉県さくらし佐倉市)

■ 地域の沿革と概要

佐倉市は、千葉県北部に位置する人口約17万人の中規模都市で、都心から電車で約1時間と比較的アクセスしやすい地域であり、北部に印旛沼が広がり、おおむね平坦であるが、丘陵・台地も広く分布し、全体としては、ゆるやかな傾斜地で比較的温暖な気候である。

昭和29年3月に印旛郡の臼井町、佐倉町、志津村、根郷村、弥富村、和田村の6町村が合併し、現在の「佐倉市」となったが、佐倉市の南部に位置する旧根郷村などは、旧来より水田が広がる地域で古くから続く集落が存在している。

佐倉市近郊は、近年では新興住宅地や工業・商業地帯が広がり市街地を形成しているが、広大な水田が広がる農村地域と新しい町が一带に広がった地域である。

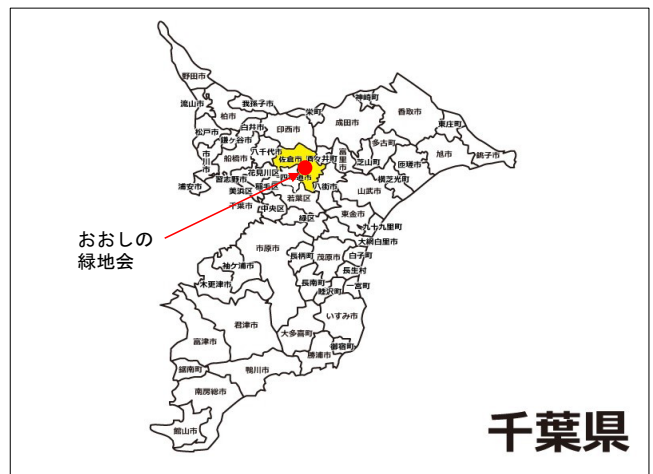
■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

大篠塚地域は、旧根郷村地域で佐倉市南部に位置し、印旛沼へと流れる一級河川・鹿島川の流域に広がる農村地域である。

水田は約40haに及び、肥沃な土壌と南向きの日照条件を活かし、こだわりをもって米作りが行われ、眼前に広がる水田を前にした山裾に、5つの集落があり、約50戸の住民が暮らしている。特筆すべき観光資源や祭事はない昔ながらの集落だが、通勤や買い物などのアクセスも良好で、穏やかな暮らしが営まれている。

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	大字単位の集団等	
組織の性格	機能的な集団等	
人口等	総人口	168,743人
	総世帯数	70,279戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数	685経営体
	個人経営体数	665経営体
	団体経営体数	20経営体
	(内、法人経営体数)	19経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	10,369ha
	耕地面積	2,860ha
	田	1,720ha
	畑	1,140ha
	耕地率	27.6%
	一経営体当たり耕地面積	4.2ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

本地域では、兼業農家の増加、既存農家の高齢化により農家の減少が進んでいた一方、米作りに不可欠な水利施設の維持管理は農家や地権者の負担や、突発的な故障や修繕に対応する費用は重くのしかかっていた。

加えて農家からは、「出来る限り米作りを続ける」という営農に対する思いと、「体力が続かなくなったら離農する」という声も聞かれるようになった。

一方で、離農後の農地の引き受けの具体的なあてや、話し合う農家の会合もなく、耕作放棄地の発

生など、地域の衰退が懸念されていた。

このような状況の中、平成26年に、農家だけでなく地権者や地域住民も構成員となり、「おおしの緑地会」を立ち上げ、多面的機能支払交付金制度を活用して、農地の維持や農業用施設の維持管理に取り組み、地権者や農家の費用負担の軽減を図ることとなった。

また、非農家の方々にも広く活動に参加いただけるよう、地域の皆が参加可能な活動として農道の草刈りや花の植栽活動など地域の皆を巻き込んだ各種の独自活動を展開している。



写真1 佐倉・産業大博覧会参加の構成員



写真2 農道沿いの植栽作業

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

地域の農業を維持していきたいという意識から、将来構想を検討することとなったが、まずは、地域住民の考え方を知ることが重要と考え、平成28年に、住民全員を対象に将来の地域の在り方に関する意向調査を実施し、この意向調査の実施が合意形成のキーポイントとなっている。

意向調査結果では、農地は荒廃させたくないが担い手がないという課題を改めて実感すると共に、農地も維持していきたいという意向が多いことが明確に浮かび上がってきた。この結果を受け、「おおしの緑地会」の全構成員を対象とした総会の中で話し合い、「地域で行う活動の年間計画」と「計画した活動の結果」を皆で合意し進めることとした。

次に、年間計画を具体化し、実践するため、「おおしの緑地会」に設置している役員会を活用し、計画に基づく活動ごときめ細かく検討を進め、実践に移すこととした。

様々な活動の取組は、地域住民が皆で考え実践に移し、結果を共有することで、地域の住民が達成感、一体感を感じ、地域の共同意識を育むと共に、地域農業の維持に係る活動が本格的に始まり、現在も継続して実施されている。

ウ 現在に至るまでの経過等について

意向調査の結果を踏まえ、新たに取組を開始した「ワイワイ感謝祭」などは、初回は試行錯誤する場面もあったが、現在も継続されている。

また、平成29年に発足した「耕作者会」は、農業維持のための課題、その課題の解決方法などについて具体的に話し合った結果、労力や機械の支援、卒農支援、大規模化や組織化が重要と整理し各項目の検討を進めることとした。その結果、組合構成員が農作業を分担して請け負う方法が良くなり、受け皿組織として、令和2年、「おおしの耕作組合」を設立し、今では地域の約1割の農地をこの組合が請け負っている。

被災農家は仲間であるとの思いから能登半島地震やウクライナ支援の義援金活動も行っている。

これら全ての活動は、毎年5月や随時発行する号外等の広報誌「おおしの便り」の発行、また総会での活動報告を通じて、非農家である地域住民にも共有すると共に、地域外の住民には、地方紙で年末の活動を毎年記事に取り上げていただくことで活動PRにも繋がっている。



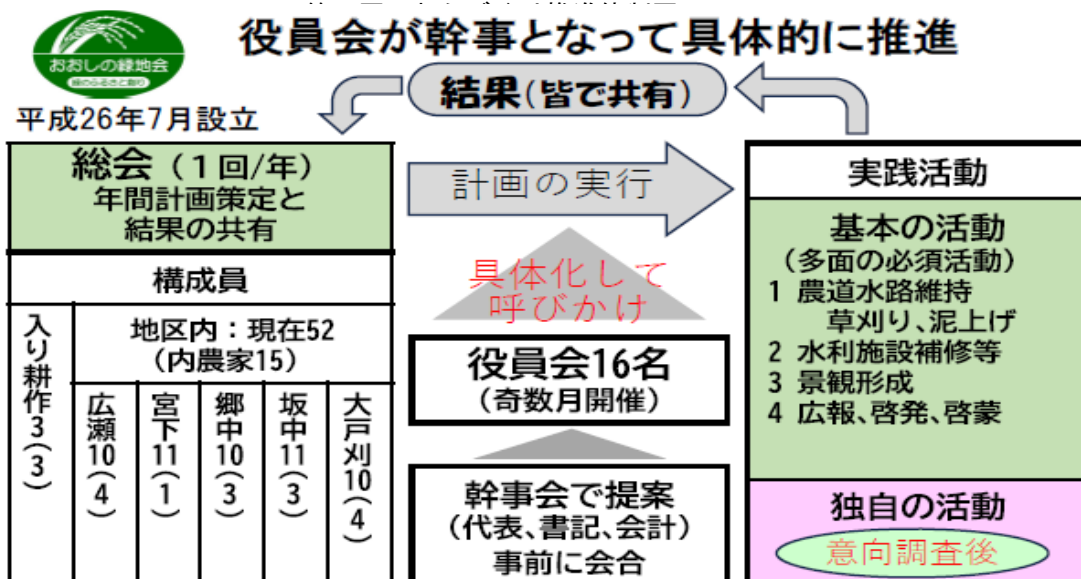
写真3 「おおしの緑地会」発行の広報誌

(2) むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

構成員：52名（うち農家15名）、役員会：16名

役員会は、代表、副代表、各地区から幹事となる組合代表（5名）の他、監査役、書記、会計、水利施設の管理を担う水路管理役等で構成している。



イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

- ① 千葉県印旛農業事務所、佐倉市農政課
多面的機能支払交付金等各種事業、情報交換など
- ② JA 千葉みらい、鹿島川土地改良区、県印旛農業事務所、米出荷先、農機具メーカー等
農地維持活動や支援策等の新着情報、稲作指導、技術相談など
- ③ 社会福祉協議会、日本赤十字社、公益サポートセンター
寄付活動（「おすそ分け活動」、「お米一升支援活動」、「義援金」）
- ④ 保育園、障害者支援施設、佐倉市
販売活動（「お米共同販売活動」、「産業大博覧会」への参加）
- ⑤ 県印旛土木事務所、佐倉市廃棄物対策課
農地近辺の川土手の草刈りで環境維持を行う「河川アダプト」、農道や水田へのポイ捨てゴミを拾う「春のクリーン活動」
- ⑥ 他市集落（印西市岩戸地区）
耕作放棄地や組織運営等などの情報交換
- ⑦ 近隣の酪農家
もみ殻を酪農家に提供し、床敷に活用。また、もみ殻を含む堆肥を地域内の畑で活用（耕畜連携・循環農業）



写真4 おすそ分け活動の様子
（社会福祉協議会にて）

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

大篠塚地域のむらづくりは、農家だけではなく、地域住民が一体となり農業・農地を維持する事を目指して、多くの住民を巻き込んで各種活動を展開されてきた。

多面的機能支払交付金制度の導入を機に、農家と非農家から構成される団体を設立し、農地や農道など維持のための基本的な活動に取り組むこととなったが、むらの将来像を明確にするため、全住民を対象に意向調査を実施したことで、地域住民の思いを実感した。

この意向調査結果を踏まえ、目的に応じた組織体制を構築・整備し、地域独自の取組として新たな取組の企画・運営・実施等は、農家だけでなく非農家も含めて地域全体が地域農業の衰退傾向に対し、持続可能なむらづくりを展開している。

また、基本活動（農地維持活動）に加え、地域全体を盛り上げるための各種活動を新たに企画・開催すると共に、地域外や他団体との連携し、多様なイベントの開催を通じ、地域住民全体が一体となって地域を盛り上げ、一人一人にふるさとに愛着と誇りが生まれ、豊かなむらづくりと合わせて人づくりにも大きな影響となっている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 農林漁業生産、流通面の取組状況

生産の基盤となる農道、水路などの施設や配水管理は水路役員等が中心となり、破損等発生リスクの予防活動として施設の事前点検を行うと共に、灌漑期も日常管理や点検を行い、破損等が発見された際は、都度参集し補修などを実施している。

豪雨や浸水発生の際などには農家以外も力を合わせて漂着ゴミを拾うなど、耕作可能な状態に維持するため皆で行動し地域農業の安定生産に寄与している。



写真5 水路の補修の様子

また、流通面では大規模農家の設備の事例紹介をする中で、これまで玄米を30kg袋ごとに積み込みし出荷していたが、負担軽減のため、1トンのフレコン袋で出荷する方法を取り入れると共に、流通面の改善に向けた新たな取引先の掘り起こしなども含めて改善に取り組んでいる。

(2) 生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

生産の組織化では、「耕作者会」を組織し、課題解決の検討を進め、1段階「労力・機械支援」、2段階「卒農支援」、3段階「大規模化」と3段階に整理した結果、各農家が機械や設備を保有している状況をいかした当地区らしい請負作業型の「おおしの耕作組合」を組織し活動している。

地域独自の集落営農組織「おおしの耕作者組合（米農家8名）」を令和2年に設立し、毎月会合で当面の作業分担などを話し合い、県農業事務所や市農政課の指導で活動を継続しており、当地区の約1割の水田で活動している。

生産面の整備等では、個々で購入・使用していた農業機械を、請負作業型の作業を支援する組織化を行い、生産面の負担軽減に取り組むと共に、販路拡大の一環として、地域内の農産物を産業大博覧会に毎年出店販売し、新たな顧客を模索しながら地域の保育園や障害者施設等に「顔の見える消費者」を開拓することで、流通基盤の改善を目指している。

(3) 構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況等

構成員の経営の改善のためには、生産面でのコスト削減や販路の確保が必要であることから、栽培技術の情報交換、農地環境や施設の適切な管理に向けた協力関係の構築、作業請負を通じた労力・機械作業の助け合い、取組実現のための組織化、販路の開拓等により、着実に安定した生産・販売が維持でき、経営の改善に繋がっている。

また、地域での農業関連イベントの開催などを通じて、苦しい農業ではなく、みんなで楽しく農業をやっている様子を見た農家の息子が、退職後は農家になる事例も現れ、後継者の確保に繋がっていると同時に、親元就農者を耕作組合員に勧誘し、仲間作り、耕作知

識などの共有を通じ育成を図っている。

米作り家族経営では、女性が担う役割は大きく、令和3年から「佐倉・産業大博覧会」への出店時には、地域の女性たちも多く参加し、地域農業の魅力を広める役割を担うことで、女性も経営に直接参画できるという手応えを再認識する機会となり、一層の意欲アップに繋がり、更なる参画が期待されている。

同博覧会には、地域農産物の販売や団体の取組紹介等を行っており、農家にとって直接販売は経験がないものの、売れたという結果により参加者にも大きな達成感、わくわく感が生まれ、農家の奥様たちも関わったことで、参加者全体のモチベーションアップにも繋がり、令和6年は17名参加し509品完売している。

また、春のクリーン活動や植栽活動などは、女性や子どもも協力・参加しやすいイベントとして開催したが、想定通り、多くの女性の参加に繋がっている。男性では気づかない点も含め、景観保全や耕作環境を整えることに大いに寄与している。

このような独自活動にも、多くの女性が参加し、地域全体で協力しあって各活動が充実している。



写真6 佐倉・産業大博覧会での販売の様子



写真7 植栽活動による景観形成

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 生活・環境整備面の取組状況

春のクリーン活動は、地域の非農家や女性も多く参加し、農道や水田へのポイ捨てやゴミを拾う活動であり、農地や景観の環境保全に努め、地域の生活環境の面でもポイ捨てしない人づくりに繋がっており、令和6年は39名参加している。

また、環境維持活動（河川アダプト）も実施し、これまで付き合いのなかった国交省関連の部署とのつながりが出来、相互の環境面での協力や情報共有が図られ、地域の保全にも寄与している。

多様な独自活動を展開したことで、住民にとって地域の帰属意識が向上し、一体感が生まれ、これらの取組により、地域の全住民が、農業維持を目指して活動している当地区に暮らすことで感じる一体感や心の豊かさ、住みよさ、地域の価値が見直されてきている。



写真8 クリーン活動
(農道等のゴミ拾い)

(2) 生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与状況 生活条件の改善や整備として、クリーン活動の実施や、水路の泥上げや崩れの補修等の

活動している。

また、植栽活動の参加を通じて、地域の景観や環境保全への意識の向上となり、結果として生活条件の改善にも繋がっている。

コミュニティの強化は、最も力をいれている点で、どの活動においても地域内で話し合いを行うことで、コミュニティを強化している。

特に「ワイワイ感謝祭」は、地域の賑わいを目的に集う場として、平成 30 年より年末に開催しており、小学校区域の近隣地域の子供たち同士のつながりが新たな来場者の増加に繋がっており、子どもにも参加できるイベント開催などにも力を入れている。令和 6 年は 96 名来場、うち地域外からは 26 名の来場となっている。



写真 9 年末開催の「ワイワイ感謝祭」

また、都市住民との交流については、「産業大博覧会」への出店や保育園等への米販売、地方紙への活動記事の掲載などを通じて、同じ市内ではあるが、都市部に在住する住民との交流を図っている。

(3) 地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等

「佐倉・産業大博覧会」への出店により、地域にとって、地域外からも注目されることで女性の社会参画への自信づくりの一助になっている。

その他、農道協の植栽やクリーン活動にも女性の参加が多く、地域コミュニケーション醸成の重要な役割を担っている。これらの取組を楽しんで行っている様子が、広報誌で紹介されることで、住民の地域への愛着や満足度向上に寄与し、地域外の方にも関心を持っていただくことで、定住を促進する側面にも繋がっている。